

An aerial photograph of a mountain valley. In the foreground, a small village with many houses is visible, situated on a slope. A river flows through the valley. The background consists of numerous layers of misty, forested mountains, creating a sense of depth and scale. The overall tone is dark and atmospheric.

## 第6章

# 本質的価値

風景というのは、明らかに作るものなのです。本当の自然というのは、少ないのです。われわれは自然だ自然だと言っておるけれど、決してもとからの自然というものは無いのです。人間が作り出したものなのです。その人間がどういふ思想を持つかでその地域の風景が決まってくるのです。

宮本常一「自然と日本人」



# 第1節 文化的景観の構造

第1章から第4章までの各章では、京都中川の北山林業景観を構成する諸側面を各主題に分けて分析した。さらに第5章においては各章の議論をもとに京都中川の北山林業景観の構造を示したうえで、調査によって特定された文化的景観の構成要素と景観単位を提示した。こうした一連の検討を総括し、本報告書における成果を概括するため、本章では京都中川の北山林業景観の本質的価値について論じ、同文化的景観の保存に向けた足掛かりとしたい。

まず本節では、京都中川の北山林業景観の全体像について構造的に把握することを試みる。前章までの論考を踏まえ、文化的景観の背景として、自然、歴史、生活・生業の3つの側面に分けてそれぞれの特性をまとめ、これらの特性を貫く文化的景観の全体性を示す。

## 1 自然、歴史、生活・生業の特性

### (1) 自然的特性

中川は「北山」の通称で親しまれる丹波高地の南縁に位置し、北から南へと流れる清滝川による浸食で生まれた深い谷間に集落が展開する。東側の山の連なりを地元ではヒガシヤマ（東山）、西側のそれをニシヤマ（西山）と呼び、それぞれが標高450～550mほどの峰々である。地層は秩父古生層であるが、土壌が浅いため植物の成長はあまりよくない。急峻な斜面地がほとんどであることから、土壌が流れやすく、全国的な地力からみても平均よりやや低いと考えられる。また至る所に岩盤が露出しており、そうした場所の多くが信仰対象となっている。

昭和30年頃まで、中川の山は尾根から谷にかけてアカマツ林→ヒノキ林や落葉広葉樹林→スギ林、という順の林相になっていた。地力が極端に低い尾根近くはアカマツ林、尾根から中腹にかけてはヒノキ林や落葉広葉樹林、そして谷底の水分と養分が豊富な土地はスギ林とされていたのである。

中川は山間であって、南方の京都市街とは隔絶されているように思えるが、現在でも周山街道（国道162号）を通じわずか10kmほどしか離れていない。周山街道が車道として全通する明治35年（1902）までは、中川と京は主に「菩提道（京道）」で結ばれていた。菩提道は中川集落の南端から菩提川に沿って南下し、上ノ水峠を越えて鷹峯（京都市北区）に至る約6kmの山道である。菩提道の標高は、中

川で約200m、上ノ水峠で約350m、鷹峯千束町で約135mとなる。女性の足でも片道2時間ほどで、中川と京都市街は徒歩でも日帰り可能な位置関係にあった。このほか、上ノ水峠から東山の尾根道も用いられてきた。このように京都市中と至近距離にあるという立地は、中川の最大の自然的特性といえるものである。

さらに、樹皮を剥いただけの材を磨いて製品化する北山丸太は、特殊な磨き砂を必要とするが、中川では菩提滝の滝つぼの砂を使用した。この砂は層状チャートを流れる水によって形成されたもので、石英質が含まれておらず、丸太に傷をつけることなく磨くことが可能で、その上磨くと色つやがよくなるといわれる。また節痕を消すための枝打ち道具の手入れには砥石が欠かせないが、それも菩提滝近くの山から採取した。このように、北山丸太の生産に必要な物資も周囲の自然から容易に手に入れてきた点も特徴といえる。

### (2) 歴史的特性

京都に近いという立地は、中世以来、林産物の移出を中心とした「山稼ぎ」の村として存続し得た、中川の歴史的特性の前提となる。

中川が初めて史料に現れるのは13世紀の初めである。もともと仁和寺の荘園「中河庄」であったとされるが、寺領であると同時に、朝廷とも結びつく供御人の村として、山の産物を調進して、その代わりに特権を得ていた。京都近郊の山村として、都と結びついた経済を徐々に発展させてきたことが、中世の中川の大きな特徴である。

近世に入ると、中川は神護寺末の西明寺領となる。近世初頭の中川村の石高は35石余、耕地・屋敷面積は3.4町弱、戸数は53であった。35石という村高は、戸数に比してかなり小さく、生活の糧を耕地ではなく山林に依存していたことがわかる。食糧の自給は低く、村外に頼っていたのである。

支配関係については、幕府による雑税（小物成）の管理や、朝廷への供御役などが重複しており、京都の近郊農山村の多くがそうであるように、中世以来の歴史的経緯を反映したものであったことがうかがわれる。一方で山城地域のような相給村落的なものではなかったことが、中川の庄屋権力の強さなどから推測される。実際、近世後期中川村の村政は、株家と称する20数家の家筋により運営されており、株家の中から選ばれた庄屋が祭祀や村政全般に強い発言権を有していたことが、史料上から明らかである。

中川やその周辺で人工的なスギの育成が成功し、スギ丸太生産が軌道に乗るに至ったのは、近世中期、すなわち17世紀末から18世紀中頃までのことであったと推測される。杉山の売買の記録は17世紀の末から見られ、実質的に山の所持を細分化していく動きは、換金の対象となる林産物の家単位での管理を容易にしたと推測される。このことは家単位での山林施業と園芸的な林業手法が徐々に確立していったことと無関係ではないだろう。他地域のような大山林地主を生まない林業が形成されていったことには、このような背景があると推測されるのである。それは、多くの株家による当番制のような村政運営につながっていた。

中川は京都に近接しているながらも、清滝川に十分な水流がなく、峠越しの陸路の輸送は人力に依ったため、長大な木材の移出には適さなかった。消費地に近接しているながら重量物の輸送が困難という立地条件においては、小規模な輸送に適した薪炭材の生産が重要であり、そのなかで北山杉のような輸送が比較的容易な小径木の林材が登場したといえる。つまり、長大材の移送に不利であるが故に、小径木の生産に限定される台杉造林をいっそう進めるほかなく、その付加価値を高めるために、上質の磨き丸太生産へと傾斜していったものと考えられよう。

明治9年（1876）の第5回京都博覧会に「北山紋一丈丸太」が中川村から出品される。また、明治43年（1910）、京都府知事から台杉の説明を受けた大正天皇が、台杉を庭木として好まれ、中川村の台杉を購入して東宮御所（現在

の迎賓館赤坂離宮）に移植したという。台杉を盆栽のように捉え、特異な形状を愛でて、庭木として用いた。これは視覚的な風景として北山杉が着目された早い例であるが、近代に入って北山杉は、また別の価値を付加していったのである。そしてそれは、東山魁夷や川端康成らに代表される戦後の文化人によってさらに強く表されていった。

このように、京都との微妙な位置関係と車両による搬出が難しい地形であった中川であるからこそ、限られた山の産物を商品化していく知恵と工夫が生まれ、時代に応じた別の価値を付加していったと考えられる。またそうした文化は、京都近郊であったが故の必然であった。

### （3）生活・生業の特性

中川的生活・生業の特性は、谷や山腹、尾根といった山の条件にあわせてスギやアカマツ、ヒノキ、雑木等を育て京都に人の手で出荷する山稼ぎで生きてきたことと、磨丸太など北山丸太の育林・加工技術を開花させることで北山林業という特別な林業の地位を築いてきたことにある。

特に後者は、中川の文化的景観を決定づける最大の特性である。それは、丸太のまま製品となる高級化粧材であるという、北山丸太の商品特性に由来するものでもある。すなわち、太さに厳しい制約を持ち、無節で綺麗な表面を有し、そしてまっすぐであること、これを山の斜面上で実現しなければならぬ林業なのであって、そのために以下のような綿密な生産・管理を必要とした。

- i) 苗木の改良：まっすぐに育つ品種を選別し、挿し木による育木生産を何世代の間継続してきた、世界唯一の伝統的なクローン林業である。
- ii) 密植による抑制栽培：低い地力の山に密植することで、樹木の太りを抑制する。
- iii) 手をかけた下刈り：何回もの下刈りによって直材となるようコントロールする。
- iv) 手をかけた枝打ち：何回もの枝打ちによる生育抑制と無節材の創出のバランスコントロール。
- v) 短い伐採期：皮をはぎ磨いただけで商品となるため、傷をつけない手運び搬出が必要とされ、それを実現するための小径木、化粧材の生産へ特化していく。そのため伐採期は3 - 40年と非常に短い。
- vi) 台杉方式の採用：台杉で密植する方式により、抑制栽培の効果を引き出す。
- vii) 綿密な危機管理：品種を厳選し、風害・雪害に対する

対策として防風林を植え、林分を細分化することでリスクを分散させる。

viii) 小規模な経営体：繊細な育林を必要とすることで、経営体は家族経営を基本的とした小規模なものとなってきた。林分が細分化している理由も同様。

以上のことが、北山林業を他の林業と差別化しうる特徴であり、こうしたことは当然ながら中川的生活文化にも大きな影響を与えている。

家族単位で生産から販売までおこなう構造は、生業空間と生活空間が渾然一体となった職住一致の屋敷地利用の姿を作り上げてきた。急斜面の谷地に集落が営まれる中川では、屋敷地は南北に長い短冊形で、民家のほぼすべてが南面して建つ。民家の南側には前庭が広がり、そこに燃料や道具を保管する小屋や、北山丸太の乾燥・貯木・加工のための納屋が構えられる。また山主や問屋業を営む家には、取引業者滞在のために北山丸太で設えられた離れ座敷が備えられているのである。山間村にもかかわらず家屋や倉庫群などの建造物が密集しており、類焼を少しでも防ぐため、民家は基本的には土蔵造りの防火住宅である。

納屋の建築様式は独特で、2階建ての納屋の場合は、1階部分よりも2階部分の方が大きく、その下にめぐる深い軒下が広い作業空間を作り出している。女性を含む家族が経営主体であり、目の届く範囲での厳重な工程管理を必要とする丸太生産が生み出した建築様式と言えるだろう。また集落の至るところに、丸太を立て掛けて乾燥させるために丸太で組んだモタシが備えられている。林業関係の施設や装置は、北山林業の変化に呼応しながら、その機能や姿を変えてきた。そのような各時期の施設や装置が集落の至る所に点在しており、中川には北山林業の変化の記憶が詰め込まれているのである。

## 2 文化的景観の全体性

以上のような、自然、歴史、生活・生業の側面を貫く京都中川の北山林業景観の全体性は次のように集約できる。

清滝川が形成する谷底から斜面に広がる集落部分は、平地の少ない山間村でありながらも戸数が多く、家の規模が比較的均質で、家族経営主体の北山林業に適応した職住一体の屋敷地が連続する。また、集落背後の山林部分は、施業段階や所有者の違うスギの小さな林地がモザイク状に入り組み、その合間に、かつてマツタケや薪炭を得てきたアカマツ林や落葉広葉樹林が点在する。この集落と山林の一体性に価値がある。

こうした景観を現出させてきたのは、平地が極端に少なく土地がやせているという負の条件を、山の産物の商品化によって克服してきた人々の営みの結果に他ならないが、京都市中まで徒歩での物資の販売が十分可能な至近距離にあったという立地がそれを可能とした。また数寄屋文化の一大消費地である京都との絶妙な距離は、北山丸太を早くから商品化していった歴史ともつながる。北山丸太の育林、加工、そして販売までもが、中川という地域内で完結することは、消費地である京都、それも数寄屋建築所有者、すなわち最終消費者のニーズにも即応して育林するという特殊な林業を達成した。その実現のために形作られていった中川独自の生業のあり様は、原木を育てて搬出するだけという日本の他の林産地と明らかに異なる。労働力の集約的かつ継続的な投下を要請する育林技術、そしてその結果特殊な人工美を醸し出した、という二重の意味において、ここでは「園芸林業」という言葉で象徴させたのである。

以上のような特質を前提とした京都中川の北山林業景観の本質的価値は、次節の3点に集約することができる。

## 第2節 本質的価値

### 1 園芸林業を軸とする山稼ぎの村

中川は、急峻で狭隘な谷すじに沿って暮らしの場が構えられている。農地がほとんどないこの谷のなかで、人々は山の恵みを糧に生きてきた。谷や山腹、尾根といった山の条件にあわせてスギやマツ、ヒノキ、落葉広葉樹等を育て京都に人の手で出荷する山稼ぎで生きてきたのである。

それを可能としたのは、山間にありながらも用材や薪炭、マツタケなどの林産物を徒歩で京都市街地まで売りに行くことができ、同時に生活に必要な物資を購入できたという立地による。特に、磨丸太生産を主とする北山林業の中心地として、中川が日本の林業の中で地位を築くことができたのは、この立地によるところが大きい。

都の至近距離で消費者のニーズや流行をそのまま生産工程に反映することが可能であったため、近世には林産物の高付加価値化を進めることができた。育苗から丸太の製品化までを集落内でおこない、北山杉の台杉仕立てやクロン苗、枝打ち、密植、磨き砂による加工など、高品質の商品を評価する都市市場が育林・加工技術を育んだといえる。こうした山の斜面上で製品を作り上げるという育林手法の実現には、細かく手をかける労働が不可欠であった。北山林業を「園芸林業」と呼ぶ技術的理由はここにある。なかでも台杉仕立ては、中川の土地条件の制約と都との距離感の中で編み出された世界で最も細い丸太の生産方法であり、徹底的な抑制栽培により生み出される北山丸太のなかでも象徴的な存在である。

日々こまめに手をかけて育林するという林業であるため、住まいと近接した労働が適合し、中川の北山林業では、よりよい製品を作り出せる労働組織として家族単位の経営が定着する。また、顧客の好みや市場の動きさえも木材の生産過程に取り入れるという、ある意味農業の商品作物栽培に近似した林業をおこなえたのも、市場の近さと共に労働力をこまめに投下できたからに他ならず、「園芸林業」と呼ぶ社会的理由がそこにある。

一方で、園芸的な農林業のあり方は、宇治での茶生産や

西ノ岡での筍栽培といったように、京都の周縁地域で共通してみられるものでもある。

林業においては独自性を持ち、京都の周縁地域のあり方という面では典型性を示す、こうした営みのある場として中川は価値がある。

### 2 北山林業の歩みが散りばめられた山の工場としての様相

近代以降は、数寄屋建築への磨丸太など北山丸太の需要の拡大に合わせ、その生産技術の向上に努めてきた。枝打ちや本仕込みのような伐採乾燥法、大正期に発明された人工絞丸太はまさに工芸技術と言っても過言ではないだろう。こうした「園芸林業」的な要素は、集落内の至る所でみることができる。たとえば、石積みで造成された屋敷地内には主屋の南に平場を確保し、納屋やイケ、モタシといった林業の作業場が設けられるとともに、ダシと呼ぶ休憩と交流の露台が設えられ、職住一体の空間が形成された。林地においても小規模な生産サイクルが採用され、モザイク状の山林となったのである。他の林業地ではみられない、中川独特の山稼ぎの姿である。

家族労働を続けながらも、大正期には組合化や企業化が進められた。周山街道の開通を受けて産地間屋が成立し、北山丸太の在庫を集落内で保管する必要性が生まれた。林業の作業場が屋敷地から独立するようになり、集落内には乾燥と保管機能を併せ持つ複層の巨大な納屋が建ち並んだ。この納屋へのアクセスのために清滝川には樋谷橋などの幅の広い作業用の橋が掛けられ、峡谷という地形条件を克服している。

戦後になると育林・加工技術の機械化や林道の整備が進み、生産量が大幅に増えた。また、全国の一般家庭の床の間に北山丸太が普及し、需要がさらに拡大した。こうしたことを受け、昭和30年代になると作業場や倉庫の大型化がさらに進み、土地に余裕のある集落外に移転するようになった。一方、建築基準法の改正で垂木需要が減少し、台

杉は庭園樹木として見出され、中川の山林は一本仕立ての北山杉で覆い尽くされることとなったのである。社会状況の変化に機敏に反応し、高度経済成長の歩みとともに質から量へと転換するなかで、画一的な景観へと移り変わったとも言える。

こうした北山林業の変化に呼応しながら、林業関係の施設や装置は、その機能や姿を変え進化を遂げてきた。そのような時代ごとの施設や装置が集落の至る所に点在しており、中川には北山林業の変化の記憶が詰め込まれている。

中川では、尾根筋から谷底の清滝川まであらゆるところが北山林業の営みの場となっており、さながら「山の工場」のような様相を呈してきた。その全体の景観のあり方に、中川の独自性がある。

### 3 都市の営みと共鳴しながら風景を設える山の暮らし

明治9年(1876)に開催された第5回京都博覧会において北山丸太が出品されており、すでに京都を代表する物産のひとつとなっていたことがわかる。また、著名な棟梁や建築家らによる近代数寄屋建築への利用や、皇族による中川への行啓もあり、北山林業は名実ともに全国区のブランドとなっていた。

こうした需要の高まりや交通網の整備から、大正期には中川に産地問屋が出現し、来客を接待する離れ座敷を設ける家も現れた。離れ座敷にはふんだんに北山丸太が使われ、室内からはモザイク状の山林の風景を望むことができ、北山杉の風景化を体現した空間装置として結実していく。山の上で製品化される、すなわち育林過程で徐々に製品とな

る北山杉は、一本仕立ての育林が支配的になるとともに、その独特な人工美が愛でられるようになる。中川の人々も、そうした人工美を顧客に見せることで商売の糧とした。

北山杉の風景化は、杉木立だけでなく、納屋や民家等、集落部にも波及する。中川の独特の風景は写真や絵画、小説の題材として取り上げられるようになっていったのである。特に、川端康成の『古都』(1962)や東山魁夷による一連の絵画により、その風景が日本全国に広く知られることとなった。林業地でありながら名所としての側面すら併せ持つようになっていったと言える。

こうした外部からの評価は、中川で暮らす人々の意識にも影響を与えた。庭で台杉を愛でたり、山野草を栽培したりと、山の生活を楽しむ余裕を生んだ。また、常緑樹一色の集落を彩るため、山や川沿いには桜や紅葉を植樹するなど、風景の再生産へとつながっている。

里の暮らしも時代とともに変化をしてきた。北山型民家という、冠婚葬祭と日常を使い分ける間取りの主屋は温存しながら、屋敷地内の付属屋や水回りは時代にあわせて増改築や居室化が進んだ。用途や形態を変えつつも、風景や自然を堪能できるような工夫は継承されている。それは、急峻で狭隘な谷の自然環境という制約のなかで、災害のリスクと向き合いながら、石垣で平場を築き、水源・日照・通風、そして眺望を確保するための知恵と工夫が施されてきた中川で暮らす作法であろう。

このように、京都など都市の営みと共鳴しつつ、山の自然や生業を日常生活のなかの美として取り込むという、ある種都市的な心性こそが、現在の「中川らしさ」の背景にある。中川はまさに、京都などの都市との支え合いのなかで生まれた山のヒンターランド(後背地)と言えよう。

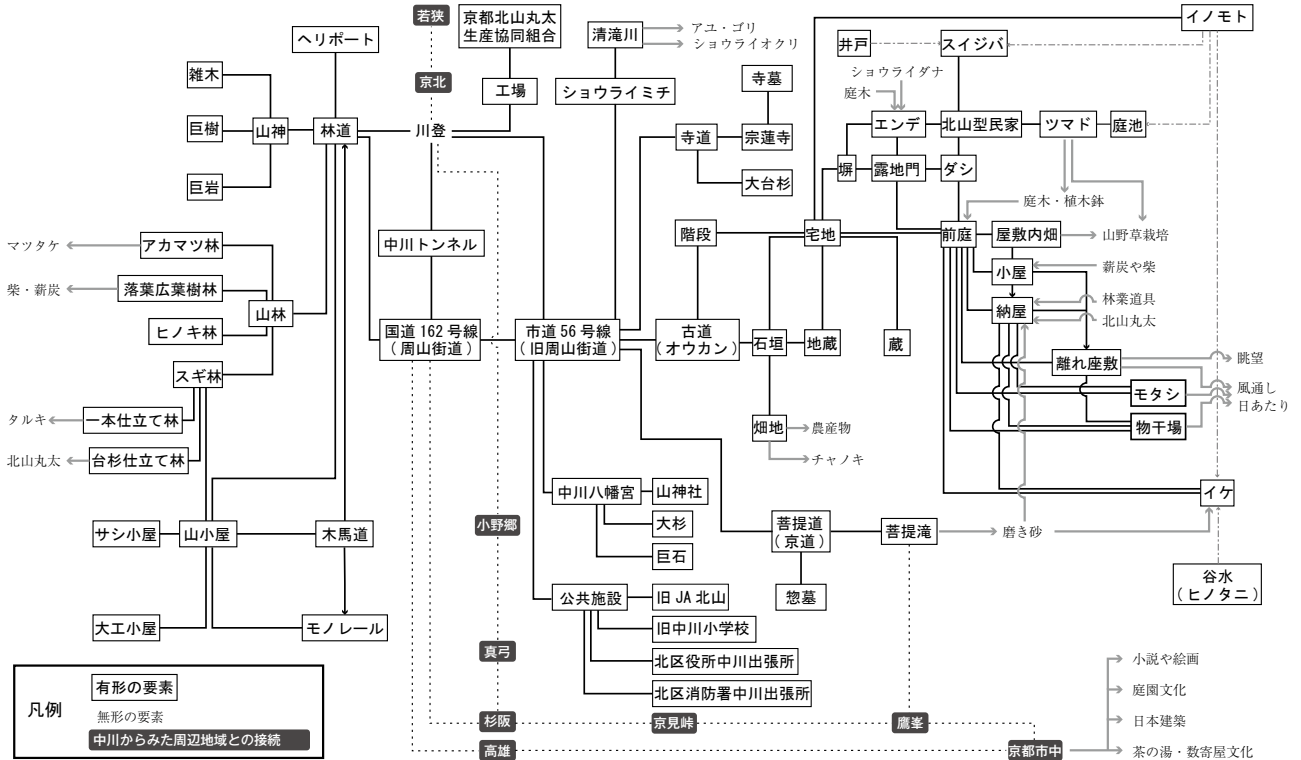


図 6-1 中川における構成要素の連関図

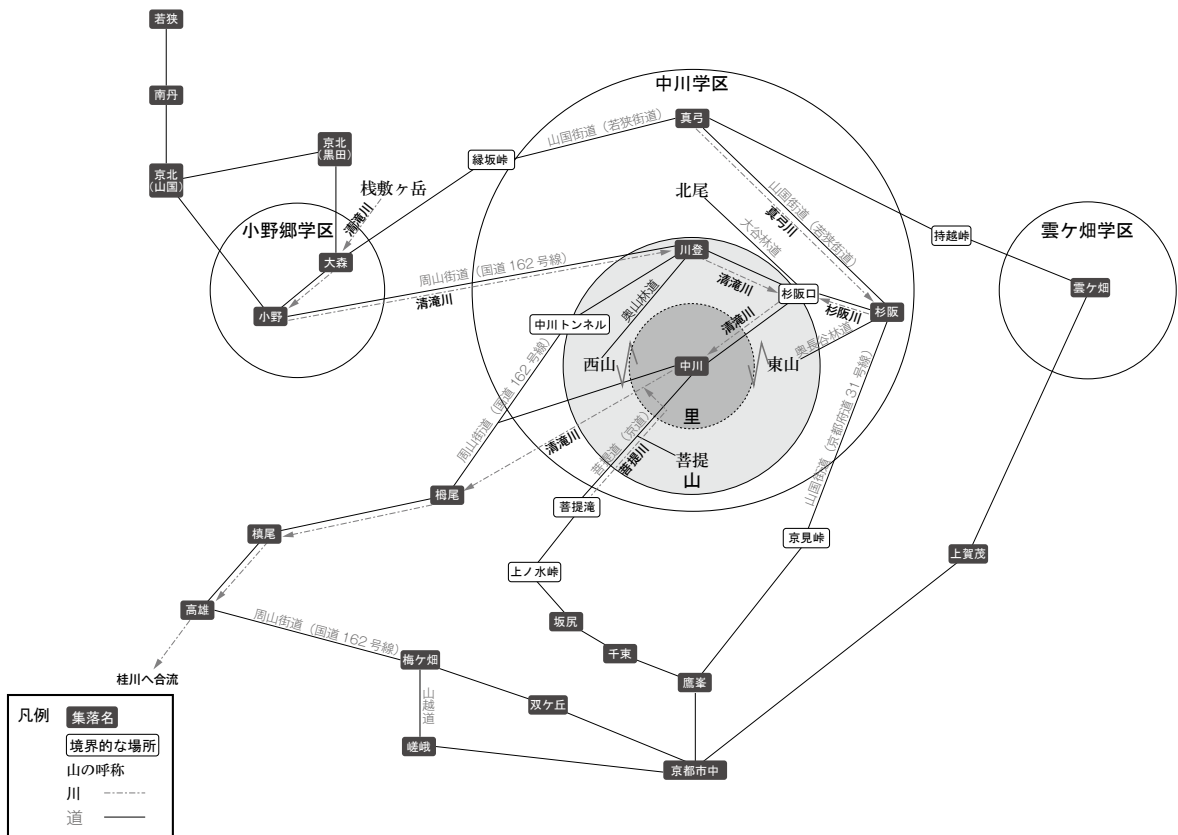


図 6-2 中川からみた周辺地域との関係図





図 6-3 「京都中川の北山林業景観」全覧図